

今週の本棚

大竹 文雄 評

善意で貧困はなくせるのか？

D・カーラン、J・アペル著（みすず書房・30150円）

「ロサンゼルスのマリナデルレイの入り江の朝はまぶしいほど晴れわたり、潮と魚の匂いと、ペリカンの鳴き声に満ちている。……一心不乱に魚をむさぼるペリカンたちは、そばを歩きかう小型ヨットには気がつかないようだ。」

一般向けとはいえ、経済の本らしくない書き出しだ。思わず引きこまれていく。この書き出しから読者が本書に抱く期待を裏切らない文章で全体が構成されている。著者のカーランはイェール大学教授、アペルは貧困政策の非営利組織で働く研究者

で、ともに開発経済学の専門家である。本書は、現在の経済学でもっともホットな分野の一つである開発経済学の研究の現場を、彼らの研究で

大切な開発援助金を無駄にしないために

経験談を通じて、いきいきと伝えてくれる。本書を読めば、この分野の研究がホットな理由を納得できる。もし大学生の時にこの本を読んでいたら、開発経済学を専門にして貧困問題の解決に貢献したいと思っただろう。経済学が貧困解決に具体的

に貢献できるということを、本書は説得的に示してくれるからだ。

貧困者向けの小口融資、マイクロクレジットは本当に効果があるのか。農家に肥料を使ってもらう、貧しい人に貯蓄を増やしてもらうにはどうすればいいのか。効果が分からずに経済援助をしても多額のお金が無駄になってしまふ。貧困解決に役立つという善意で集まった大切なお金を有効に使う必要があるのだ。

貧困問題は、どこでも共通の理由によって引き起こされているわけではない。有効な貧困対策は、社会や個人によって異なる。まず、問題の根本原因を明らかにする必要がある。そのために用いられるのが、伝統的な経済学と人々の意思決定に問題があることを認めた行動経済学だ。

しかし、問題が明らかになっても、対策として何が有効かは別の問題

だ。現在の開発経済学では、医学の治験と同様のランダム化比較試験（RCT）という手法を用いて貧困解決プログラムの有効性を評価する。治験では、治験に参加する同意をした患者を、新薬を投与される患者（治療群）と偽薬を投与されるグループ（対照群）にランダムにわけ、その効果を比較する。貧困プログラムも有効性も治験と同じ手法で確かめることができるのだ。

今まで政策の評価に使われてきたのは、ある政策を行ったとき、それ以前と以降で人々の暮らしがどう

う変化したかを調べる「ビフォー・アフター」分析だ。しかし、これだと政策と同時に他の要因も変化した場合には純粋な政策効果を取り出すことはできない。調べるべきことは、

「その政策がなかった場合と比べてどうか」である。RCTが有効性を

発揮するのはここだ。対照群と介入（治療）群を設計すれば、両者の結果の差を調べるだけで評価を行えるのがRCTの特徴だ。分かりやすいので第三者も説得しやすい。

最後の章で、貧困対策としてどれが有効であったのかがまとめられている。マイクロ貯蓄、メールで貯蓄を促す、前払いで肥料を売る、寄生虫駆除、少人数グループでの補習授業、塩素デイスペンサーできれいな水を、コミットメント装置を提供する、という七つだ。

こうした研究成果がどうやって得られたのだろうか。貧困の現場にはどのような課題があったのか、彼らはどうのよう人物と出会ったのか、どのようにRCTを設計していったのか。本書はわくわくする研究の物語だ。物語を通じてRCTを用いた政策評価の有効性を説得的に示している。税金を有効に使うためにRCTの日本での活用を願うのは私だけではないだろう。（清川幸美訳）